令和2年度前期　学群教育改善計画

学群（学部）名	事業構想学群
学群（学部）長名	中田千彦

1－(1). 授業評価アンケート結果を踏まえ、学群で改善すべき重点課題とその理由について3つ挙げてください。 ※なお、前回から継続して同様の課題を記載する場合は、冒頭に「継続」と記載してください。		
①	課題	大教室での講義系リアルタイム（ライブ）による遠隔授業の実施環境の整備について、使用機材の設置方法や運用などに関する課題が整理された。
	理由	COVID-19感染症対策に伴い、大教室（多人数）の講義科目が遠隔での実施となり、授業配信のためのスタジオ形式の教育設備がこれまでとは異なる準備や運営を必要とされることが顕在化したから。
②	課題	演習（実技系演習）と対面による卒業研究指導において、感染症対策を十分に取るための様々な試行錯誤が行われ、従前とは異なる教育環境の必要性が注目されるようになった。
	理由	遠隔での個別指導そのものの運営は大きな課題とならないが、個別の研究や指導の内容の確認を緻密に進めていく上では、旧来の対面型の指導と異なり、その成果を確認するための方法について新たな技術開発が求められている。
③	課題	課外活動などによる大学での学習や研究に関する相乗効果を大きく期待できない状況が長く続くことになった。
	理由	時間割上の学習だけでなく、図書館でのリサーチや課外活動を通じた情報共有が、日々の大学における学習に大きく貢献しているが、その代替え手段を遠隔で獲得することの困難さが露見したと言える。

1－(2). 上記のそれぞれの課題を解決するための取組と、それらの取組を具体的にどのように進めていくか書いてください。	
①	COVID-19感染症対策に伴い、事業構想学群では速やかに遠隔授業の実施体制を整え、大学全体として通信によるリモート会議システムを活用した講義系授業を展開して、各担当教員からの実績報告を集約することで大学のける講義系授業の遠隔化については順調に進めることができた。一方で、対面授業で実施されて来たペーパーテスト（ミニレポートなども含む）や質疑応答、小規模のワークショップなどを遠隔のシステムでそのまま運用することは難しく、実現可能性の高い手法に置き換え、場合によっては技術開発を行いながら問題解決に取り組む姿勢を獲得できたことが大きな収穫と言える。
②	前期の間は遠隔（リモート）での実施が中心となった。その中で、対面で行う必要性のあるもの、遠隔でできること（遠隔であるからこそ効果を発揮することも含む）の峻別を進めていきながら、従来のような全てを対面で行って来た状況に甘んじることなく、新しい日常における対面（面談による指導）の本質的な必要性を吟味し、それが許容される限られた状況における教育研究のあり方について、緻密な手法開発を必要としていることが見えて来たので、その話題を大学教育における今後の展望として位置付けつつ、高等教育にふさわしい教育研究を展開していく必要性が高まったと言える。
③	大学での学生生活が、単に授業を受けたり試験を受けたりすることだけでなく、その合間に生じる課外活動や交流活動によって充実されていたことに気づかされる事態となった。一方で、感染対策を考慮すると不用意にそれらを容認することは難しく、感染予防を徹底しつつも大学生活の活性化につながるこうした課外活動や交流のありかたについて、真剣に考察し実施検討する必要性も高まっていることが確認された。今後、多様な知見を参照しつつ、宮城大学であるからこそ実現可能な大学の空間や環境をいかした課外活動や交流事業の実施に取り組んでいきたい。

2－(1). 各科目の授業改善計画から、授業実施・授業改善の良い事例を挙げてください。
2020年7月に竣工したデザイン研究棟は、デザイン系演習や卒業研究の実践の場として学生の作業などを効率化させるための空間性、開放性が備えられた建物とのあっており、この教育環境を活用した新しい演習、実習の実践と精緻化しつつある遠隔授業の展開の組み合わせが、今後の取り組みの指針になると考えられる。
2－(2). 上記の事例を学群の中でどのように共有して教育改善につなげていくか書いてください。
学群全体として、上記のような実践を普及、波及させながら、デザイン系に限定されない教育研究手法の開発に取り組んでいきたい。特にIoTやDXを活用して教材う教授方法の開発や展開には大きな可能性が感じられ、第三期中期計画で取り組む様々な活動や事業とも円滑に連動させ、実践的な教育改善が進捗することが期待されている。